

ある被害者遺族の有効なモーニングワークに関する質的分析

—ラガーシュ仮説の再検討を含めて—

山本 力 (岡山大学教育学部)

濱崎 碧・玉井千里・山崎芙美子 (岡山大学教育学部3回生)

平成13年6月8日に附属池田小学校で発生した児童殺傷事件の被害者遺族の一人である本郷由美子さんの手記『虹とひまわりの娘』を分析素材として、どんな悲嘆の対処法や社会的サポートがモーニングワークの促進に有効であるのかを探索的に探ることを研究の主な目的とした。加えて、「死者を殺す」というラガーシュ仮説の妥当性に関する若干の検討を行った。その結果、モーニングワークを通して親子の「絆」の結び直しがはかられ、娘に対する「愛の物語」が生成されていった過程が明らかになった。

キーワード：被害者家族、モーニングワーク、物語、社会的サポート、ラガーシュ仮説

1. 問題の所在と目的

近年、学校現場で重大事件が続発し、学校の安全管理や危機管理が相当に検討されるようになった。平成12年には30件近くもの思春期の子どもが起こした重大事件が頻発し、様々の視点から事件の背景分析や再発防止に関する検討(例：山本 他, 2001)がなされた。加えて児童生徒や保護者の心のケアなどの緊急支援についても心理臨床の視点から検討が加えられ、緊急支援マニュアル(例：福岡県臨床心理士会, 2001.他)も作成されてきた。

被害者や被害者遺族の個々人の悲嘆経験に焦点をあわせた研究の多くは心的外傷後ストレス障害(PTSD)に限定された視点からなされている。しかし、被害者遺族の辛い経験は理論的には悲嘆モデルと心的外傷モデルの交差するところに位置づけられる。近年、Jacobs(1998)の提起した臨床単位である「外傷性悲嘆(traumatic grief)」が近接概念として参考になる。ただ、殺人や事故によって子どもを亡くした親は筆舌に尽くしがたい経験を味わうが、その多様な様相と過程はトラウマ論や悲嘆論という限定的概念だけでは把握しきれない。また被害者遺族の喪失経験の実態は死別研究の一環として若干の蓄積がなされてはいるが、その経験の質からみて臨床的接近が容易ではなく、これまで詳細な事例的検討はほとんど実施されていない。

そこで、本研究では附属池田小学校の被害者遺族

の一人である本郷由美子さんの手記である『虹とひまわりの娘』から分析素材(テキスト)を抽出し、その質的分析を通して被害者遺族のモーニングワーク[mourning workには「喪の仕事」、または「喪の作業」の二つの訳語がある]の本質を把握したいと考えた。我々の最初のリサーチ・クエスションは以下の三つの問いであった。①本郷さんはどのような喪失経験をしたのか。②絶望的・外傷的な喪失経験を生き抜くために有効なモーニングワーク(ストレス・コーピングを含む)はどんな心理的営みなのか。③どのような種類のソーシャルサポートが本郷さんの内的なモーニングワークの進展に貢献したのか。これらの問いに関連するテキストを抽出し分析と考察を加えることが本論文の一つの目的である。

加えて、本郷さんの事例の質的検討を進めている経過の中で、新たな「問い」が生じた。

それはモーニングワークの本質に関わる理論的争点になるとなる「問い」であると思われた。分析対象の事例では故人を「亡くなった存在として見ない、生きている存在として対応する」という基本姿勢が貫かれている。その基本姿勢に支えられて困難なモーニングワークが有効に進展していることが見出された。

しかし、学問的認識としては本郷さんの基本姿勢とは相反する理論仮説が従来から存在してきた。すなわちモーニングワークを介して愛着対象と別れの作業を行うためには心理的水準で「死者を殺す」と

いう過程を経る必要があるというラガーシュ仮説 (Lagache, 1967) である。山本 (1978) も、「故人が死んで法要を営む夢」を見ることを通じて、速やかな心の回復を図っていった悲嘆カウンセリングの臨床事例を報告した。果たしてモーニングワークの進展のためには心の中で「死者を殺す」という象徴的な作業を経ることが有効なのか、それとも殺すという内的作業を媒介せずに「生かし続ける」という作業に徹することが回復にとってより有効なのか、という「問い」を再検討する必要があるためである。そこで本研究の最後の狙いとして「ラガーシュ仮説」の妥当性の是非を再検討することを加えて若干の考察を行いたい。

II. 附属池田小学校児童殺傷事件の概要

平成 13 年 6 月 8 日 (金) の午前 10 時過ぎ頃、大阪教育大学附属池田小学校に出刃包丁を持った詫間守 (39 歳) が東門より校内に侵入し、校舎 1 階にある 2 年南組の教室にまず入り、5 人の児童を包丁で次々と突き刺し、死に至らしめた。さらに隣接する 2 年西組の教室に入り、3 人の児童を刺し、うち 1 人を死に至らしめた。動転した西組の担任は警察に通報するため子どもたちを残して事務室に走り、10 時 18 分に 110 番に通報した。この間に犯人は逃げた児童を次々と刺し、さらに 1 人を死亡させた。

犯人が教室から出たところ、1 年南組の担任にタックルされ、捕まえられそうになったので同教員を刺した。ついで 1 年南組の教室にも侵入し、担任不在の教室で児童に切りつけ、1 人を死に至らしめた。駆けつけた 2 年南組の教員が後ろから右腕をつかんだが、包丁で切りつけ、倒れている児童をも刺した。そして、10 時 20 分頃、ようやく 2 年南組の担任と副校長によって犯人は取り押さえられ、現場に到着した警察官に引き渡された。

犠牲者は死者 8 名 (女兒 7 名・男児 1 名)、負傷者 15 名 (女兒 8 名・男児 5 名・教員 2 名) であった。なお、死亡した多くの児童は即死ではなく、救命活動の遅れも一因したと推定される失血死であった。(この事例研究で素材として検討する) 2 年南組の犠牲者の一人である本郷優希さんも教室内で背後から左胸を刺されて、致命傷を負いながらも懸命に廊下まで逃れ出た。そして校舎の出口に向かって渡り廊下を必死に歩いている途中 (教室から約 39 メートルの位置) で、力尽きて倒れたことが判明している。

平成 13 年 9 月 14 日、大阪地方検察庁は被告人を殺人、殺人未遂、建物侵入及び銃刀法違反で大阪地方裁判所に起訴した。平成 15 年 8 月 28 日、大阪地方裁判所は詫間被告の刑事責任能力を認めた上で「自己中心的な犯行」と求刑通り死刑を言い渡した。弁護側は不服として控訴したが、結局 9 月 26 日、控訴を取り下げ、詫間被告の死刑が確定した。

(注) 事件概要は「8 Angels' Web Site」の資料等より引用して再構成した。

III. 方法

(1) 分析資料

- ・本郷由美子 (2003) 『虹とひまわりの娘』, 講談社。
- ・ 8 Angels' Web Site
(池田小学校被害者の会のホームページ)

(2) 手続き

- ① 被害者遺族の気持ちに変化を及ぼした課題 (本人の行動) や周囲のサポート、筆者の気持ちが書かれている部分を本文より抜き出す。またそれ以外でも印象的な出来事など、網羅的に本文から抜き出しておく。
- ② 各研究者がピックアップした文を集め、全てカード化する。必要に応じて文意がわかりやすいように状況説明を書き加える。
- ③ カード一枚一枚のコードを生成する。コードを作り上げていく上では「これはどういうことを意味しているのか」を問いかけながらそれを表現する短い言葉を記入する。この時点では他のカードの内容を意識せず、それぞれのカードの内容を捉えたコード生成をする。なおコード化は 4 名の研究者による合意による妥当性確認の手続きを行った。
- ④ コード名がつけられたカードをグループ化することによって、その個々のグループでの本質的な特徴を明らかにする。
- ⑤ グループ化とは別に、モーニングワークの過程をわかりやすくするために、時系列に沿ってカードを整理する。明確な時期が記されていないものは前後の文脈などから研究者が推測して時期の設定を行った。

以上の手続きを踏まえて、以下の結果に示したような特徴を抽出した。

IV. 結果：手記の分析

ここでは研究目的の問いに対応する形で、3領域に区分して手記から抽出された経験を提示していきたい。すなわち、遺族の悲嘆経験、及び遺族の対処方法、そして社会的サポートである。なお抽出した遺族の「経験」の断片は時系列的に記述した。

1. 遺族の悲嘆経験

遺族の悲嘆経験を時系列的に抽出することを試みた。手記の中から代表的なエピソードを選択し以下に記述してみたい。

① 事件直後：非現実感、絶望的悲嘆、混乱、自責感、悲嘆の波状攻撃

喪失直後の典型的経験は強い衝撃と茫然自失とした「非現実感」である。いわゆる現実否認 (denial) や信じられない感覚 (disbelief) もこの非現実感の範疇に入る。

「優希が亡くなってからの私は、まるで抜け殻のような状態で毎日を過ごしました。感情がまったく麻痺してしまい、時間の感覚すら失ってしまったかのようでした。周囲の出来事が現実のことと思えず、現実と隔てられた世界を、自分ひとりがふわふわと浮遊しているような感覚にとらわれていたのです。(P.40)」

喪失後の悲痛はしばしば波状的に襲ってくる。「津波のように」と喩える人もいる。その強い悲しみは「痛み」を伴う。胸を締め付けるような情緒的な痛みを wrench と表現する。本郷さんの体験は以下のような様相を呈していた。

「毎日のように、悲しみという波が私に襲いかかりました。小さな波が何度も押し寄せ、それがだんだん大波になって、私をすっかり飲み込んでしまいます。もがき苦しんで、やっとのことで脱出すると、すぐまた、同じような波にさらわれてしまう… (P.41)」

② 事件直後：フラッシュバック、外出恐怖症、包丁恐怖症

喪失後の外傷性悲嘆では PTSD 様の再体験・回避・過覚醒の3徴候が現れる。本郷さんの再体験(フラッシュバック)の一つは現場に駆けつけたときの学校の異常な風景であった。

「あのとき、校庭で見た子どもたちのおびえきった表情

や騒然とした学校の情景が、日に幾度となく脳裏を横切り、そのたびに、激しい恐怖と不安に襲われてしまうのでした。(P.100)」

また事件を連想させる事態や物に触れただけで強い苦痛が伴い、それらを回避する事態となった。例えば両親共に「包丁」に対して恐怖症状が出てきた。

「自宅のキッチンに立ったとき、突然、頭の中に鮮明な『包丁』の形が浮かび、かつてないほどの不安感に襲われました。…あの事件が私の中で一直線に結びつき、以来、私は包丁に触ることはおろか、見ることもできなくなってしまいました。…主人もまったく同じ後遺症に悩んでいたのです。(P.102)」

③ 1ヵ月後：優希がメッセージをくれたと思わせる不思議な体験

極限状況の経験をしていると、しばしば不思議な事態が生起する。本郷さんの場合にも不思議な体験に遭遇し、そこに深い意味の繋がりを感ぜずにはいられないエピソードが多々あった。

「急に目を覚ました下の娘が、奇妙なことを言い出したのです。『ママ、優希ちゃん、ひとりで寂しいってエーン・エーンしてるよ』『歩けないって言ってる。おうちへ帰りたいんだって』(中略・次の日の朝、学校に向かう)何だろう？近づいてみると、子どもたちが使っていたロッカーの上に、ポツンと小さな白い運動靴が置かれています。それを見た瞬間、私は反射的に靴をつかみ、夢中で抱きかかえました。『これは、優希の靴です！』(P.74)」

「ある晩、疲労で頭がボーっとしていたとき、『ママ、痛いよ』という優希の声が耳の奥で響いたのです。それを聞いたとたん、すぐ学校に行かなくては、と思いました。早朝、学校に駆けつけると、現場にはブルーのシートが敷かれ、その上を捜査員の方たちが歩き回っていたのです。『そうだったんだ。優希は警察の人たちに踏まれて痛がっていたのね。』(P.77)」

これらの体験は客観的に見れば独立している偶然の二つの事態である。しかし、偶然に生起する出来事が本郷さんの内面では一本の意味連鎖になって体験される。ユングのいう「偶然の意味の一致」の事態である。こうした複数の出来事は因果律によって説明できるものではなく、不思議な意味の繋がりを感得させる共時的な事態 (synchronicity) となる。

④ 半年後：周囲と自分との時間のズレ、娘の不在という現実と直面化

喪失経験は往々にして故人の思い出に浸される内界と日常的な外界とのギャップを生み出す。内的世界は喪失時に固定されたまま、無時間的な世界が展開する。それに反して周囲の現実の時間はどんどん先に進んでいく。

「世間と私の間に時間のずれが生まれ、そのギャップがどんどん大きくなっていくのでした。それにつれて、私の内部にも、奇妙な変化が起こりました。自分の中に幾人も自分が生まれ、それぞれが別の行動を取りはじめたのです。(P.96)」

本郷さんは多重人格のように、異なる現実を背負って生きる「複数の自己像」を自分の中に見出している。娘が生きていると信じて過ごす自分、亡くなったことを前提にして活動する自分など、色々な「自己」が統合されないまま、その時その場の現実を生きているのである。

半年余りを経た頃、マスコミ関係者から「そろそろ半年になりますね」と声を掛けられ、現実の時間の経過を改めて認識するようになる。また、現実検討に迫られる事態にも遭遇していく。

「(優希のいない初めてのバースデイ・パーティ) バースデイ・ソングが終わっても、赤々と燃え続けている八本のろうソク。それは、この日の主演、炎を吹き消すはずの優希が、すでにこの世に存在しないという、あまりにもはっきりとした証だったからです。それまでの私は、たとえ目には見えなくても、優希はいつも私といっしょにいるのだと、自分に言い聞かせてきました。けれど、現実は違ったのです。(P.98)」

⑤ 半年後：犯人に激しい怒りがわからない体験

対象喪失は怒りや自責の念を随伴する。ことに理不尽な事件では他者に対する怒りが激しいことが少なくない。しかしながら本郷由美子さんは激しい憤りを表出することをなぜか阻まれた。それが犯人(生きている死者)に対する無力感の故なのか、自己防衛の故なのか、それとも本郷さんの優しい性格の故なのか、それは分からない。(神戸須磨連続児童殺傷事件の被害者遺族の山下京子さんも犯人に対する怒りや恨みの感情は少ない、むしろ娘と同世代の少年

への隣人愛の中に昇華されている。)

「最愛の娘を奪われたのに、どうして、犯人に心の底から憤ることができないのだろうか？私はそんな自分に強いいらだちを覚えました。このなんともいえない不快な感情を先生に率直に訴えると、『それは、あなたの悲しみが深すぎて、自分の心が壊れないよう、自己防衛力が働いて心を封印してしまっているのでしょうか』と説明されようやく納得できたのでした。(P.106)」

⑥ 半年～1年後：犯行現場での娘のイメージの肯定的変化

娘が亡くなった廊下は悲惨な事件の再体験を呼び起こし、辛い場所となる。しかし、本郷さんは半年以上経過した頃より少しずつ現場の意味が変容していった。モーニングワークの進展と共に、娘の想起イメージが笑顔へと変化し、それと共に廊下は娘との再会の場所と変わっていった。辛く避けたい場所から、かけがえのない場所へと転換していった。

「月日がたつうち、廊下に立った私の脳裏に浮かぶ優希の表情に、少しずつですが変化が現れはじめました。苦しそうな優希の表情がだんだんと笑顔に変わっていったのです。(中略) 私にとって、その廊下は、いつしか笑顔いっぱい元気な優希に会える場所になり、『よく頑張ったね』とほめてあげられる、かけがえのない場所になっていきました。」

⑦ 1年後：復活のメッセージとしての切り花の根つきと開花

本郷さんにとって「植物」は象徴的意味を担っていた。なぜなら、優希ちゃんは花の大好きな子どもだったから。花の命は優希ちゃんの命と感じられた。

「校門にお供えしてあった花束を植えた…。切り花だったのに根をつけて花を咲かせたのです。…優希たち八人の天使がお花になって、『ママ、優希たちはここにいるよ。元気だよ』と呼びかけてくれているような気がしてきました。一周忌が近づき、気持ちが沈み始めていた私を励ますために、優希たちが花となって、そこに咲き誇ってくれたのかもしれない。(中略) 優希の命がひとつの『種』となって、みなさんの温かい心が次々と芽吹き、私の心の中にも『希望』という実をつけていってくれたら。(P.160)」

モーニングワークは心理的水準での復活・再生の

作業でもある。供養の切り花を校庭に植えたところ幸運にも根をつけた。そして「花」を咲かせた、まるで優希ちゃんが蘇ったかのように。植物の命の不思議なドラマに亡くなった子どもたちの希望のメッセージを感じ取るのも、モーニングワークの営みである。

⑧ 1年後以降：優希と共に生きる

本郷さんの魂の基底に流れている感覚は「優希と共にいる」と願いである。優希ちゃんが大好きな植物に接しながら娘の息吹を感じている。月日の経過に伴って「娘と共に生きる」という感覚の裏に、喪失対象の「内在化」が確実に進行していることが理解される。

「一人きりの時間を、優希を感じ、優希と過ごす時間にあてています。ベランダに出て、優希が育てていたペゴニア、サボテン、金魚草などの花々の世話をしながら、優希に話しかけ、風に揺れる花びらの向こうから、かすかに響いてくる優希の笑い声に耳を傾けます。(P.93)」

「(優希と訪れた場所にでかける)主人は…あの頃と同じように、ごく自然に『ふたり』の娘たちと遊んでいたのです。私は海の見えるベンチに腰掛け、主人と下の娘の歓声を背に聞きながら、いま、この瞬間、自分が優希とともに過ごしているのだと感じていました。(P.114)」

2. 遺族の対処方法

① 数週間後：他人に自分の思いや感情を話す

心の中に充満している負の感情を一人で抱え込むのではなく、周りに表現し、分かち合うことによって心の負担を少しでも軽くすることができる。もっとも「話す」ことが「放す」ことにつながる効果を生み出すかどうかは聞き手の姿勢に大きく左右される。

「私たちの心の中には、簡単に人に言うことのできない、怒り、苦しみ、嘆き、悲しみが充満していて、そのはけ口を必要としていたからです。(P.160)」

「犯罪被害者遺族には、自分たち遺族の思いは、結局、私たち以外の人にはわかってもらえないだろうという、徒労感に似た共通の感覚があります。だから私たちは、自分の思いを自分だけで抱え込み、誰かに伝えようとはしなくなってしまう。メロディさんは彼女の実体験から、もっと、積極的に周囲に話すことこそが大事なのだと、私を励ましてくれたのでした。このやり取りをきっかけに、私は少し

ずつ自分の気持ちを他人に伝えられるようになり…(P.133)」

② 数週間後：事件についての情報収集

優希の全てを知っておくことが親としての役目であると感じた。あの日、何が起きたのか。なぜ事件に遭遇したのか。事件について知らずにはおれない。そのニーズを満たすべく行動することは社会との接点を保つ上でも意味があった。

「遺族は『八人の天使たちの両親』の名前で、保護者のみなさんに情報提供をお願いする手紙を書き、学校で保護者の方が集まっているときなどに時間を頂いて、私たち遺族の率直な気持ちを伝えることにしたのです。(P.84)」

「私書箱を設け、情報を集めたりする一方で、消防署や警察、病院や学校近くのスーパーにも、可能限り足を運んで、あの日のことを聞いて回りました。(P.85)」

③ 1ヵ月後：優希の記憶に再び向きあう

本郷さんは事件直後から優希のことを知りたいという思いが強かったが、優希ちゃんの思い出をたどるときには大変な苦痛を伴った。そのため、優希ちゃんにまつわる思い出を封印していた。しかし、1ヶ月後に封印を解いた。この勇気は転機の一つとなった。

「主人と一緒にガムテープをはがし、中にあるものをひとつひとつ取り出します。あの日、背負っていた通学リュック、体操服、給食服、机の中にあつた道具箱…ひとつひとつ、ていねいにダンボール箱から取り出して、主人とふたりして抱きしめました。(P.81)」

そして、知らなかった優希を探し出し、空白を埋めていく過程の中で、娘にまつわるものを手元に置き、それらから優希を感じることで本郷さんの心はいやされていった。

④ 2ヶ月後：厳罰と安全な学校づくりを願う署名活動を始める

モーニングワークでは内的営みと外的営みの二面が機能することが必要である。喪の仕事においては死者と対話する内的世界と生者と対話する外的世界の両方に錨を下ろさねばならない。子どもの死を無駄にしたくない、何かをせすにはおれない。その悲しみのパッションに駆動されて、「署名活動」という

現実的な課題を遂行すること（外的営み）が、もう一つの悲嘆の対処法となっていた。

「私は激しい焦燥感を覚えはじめました。押し寄せる悲しみの中で、もうこれ以上じっとしてられない、何かをせずにはられないという気持ちになっていったのです。（中略）署名活動を始める前は、なかば引きこもり状態になっていたのですが、そんな自分がうのように積極的になってきました。（P.126）」

⑤ 数ヶ月後：優希がやり残したことを引き継いで達成する

故人の「やり残したこと（unfinished business）」を引き継いで完成される営みは一般的にみて珍しくない。喪失対象との同一化（identification with lost object）の一種である。

『『本ごう ゆき』と書かれたペゴニアの鉢植えは、自宅に持ち帰って、優希の代わりに育てることにしました。『優希ちゃん』と声をかけながら、丹精こめて世話を続けたペゴニアは、翌年の春を迎えると、赤い花をたくさんつけるようになりました。まるで、優希の唇のように可憐な色合いの、その花を見つめていると、『せいかつ』の授業中にペゴニアの世話をしている優希と自分が、一体化したような気持ちになるのです。』

娘のやり残したことを引き継いでやることは、故人と同じ方向を向いて共に歩んでいる実感をもたらす。娘の代わりに自分が生きている感じもする。本郷さんは、引き継ぐ営みを通して、娘と「再結合・再会」（reunion）を果たしていると、理解される。

⑥ 1年後：近い未来の目標を立てる

事件以来、時間は止まり、失われた過去と現在と向き合う日々、未来の希望が全く欠落していた。1周忌を迎えた頃、未来について心をはせることが可能となった。それがかつて通っていた教会幼稚園での「記念礼拝」と「優希ちゃんと遊ぶ会」の企画だった。

「親しい友人たちといっしょに教会で優希のための『催し』を行うという、小さな目標を立てることにしました。こうして私たちは、これまで先の見えなかった人生に、ようやく、小さな明かりが灯ったと感じるようになったのです。これなら、自分の『心の傷』から逃げずに、まっすぐ

向かい合っていけるかもしれない。（P.108）」

絶望、つまり《hope-less》という無明の闇の中に希望（hope）の灯火が微かに見えて、時間的展望が少しずつ開けてくるのは「喪」が明ける予兆である。打ちひしがれた気持ちが徐々に前向きに流れはじめたのであった。

3. 社会的サポート

① 事件直後～1ヵ月：道具的サポートと1人で悲しめる環境づくり

娘を失ったことによる後遺症など、精神的にも身体的にも疲れきっていた本郷さんは日常生活を送るのも困難であった。そんな本郷さんの支えとなっていたのは、近所の人たちによって料理が届けられたり、下の妹の世話をしてもらったりといった「道具的サポート」であった。

「包丁恐怖症になった私を助けてくれたのも、服部さん、宇津さんたちとその仲間の皆さんや、優希の幼稚園の同級生のお母様方でした。買い物を代行してくれたばかりか、食材を全員で手分けして包丁で切り分け、1週間分の量を届けてくれました。（中略）玄関前にお惣菜を置いてくださる方もいました。それも、みんなで連絡を取り合い、食材やお惣菜が重ならないよう注意してくれていたということです。肉体的にも精神的にも、どれほどありがたかったことでしょう。（P.149）」

最初の段階のサポートは、余計なことを言わずに寄り添うこと、そして身の回りの現実的な雑用を手伝うという「道具的サポート」が有効であった。現実の雑事を肩代わりして支援することで、一人で悲しんだり、考えたりする「守りの環境」を整えることが必要である。

② 事件直後～1年：受苦の感情（passion）を受け止める器と情緒的サポート

安易な励ましではなく静かに寄り添い、どんな感情をぶつけたとしても無言のままに全て受け止めてくれるということが本郷さんに安心感を与えた。これは親しい友人や専門家であるカウンセラーにできる「情緒的サポート」である

「感情が不安定になっている人間の繰り言を一方的に聞かされるのは、さぞつらかったことでしょう。なのに、

彼女たちはそんな気配をおくびにも出さず、私が何をしゃべっても、『何があっても、私たちはそばにいるから。ありのままのあなたの友達だから』と言い続けてくれたのです。その無言のいたわりが、沈黙の包容力が、どれほど癒してくれたことか。(P.147)』

「カウンセリングは一時間で済むこともあれば、三時間、四時間に及ぶこともあります。たとえ、すぐに答えが出なくても、そのときの自分の状態や気持ちを先生にぶつけ、それに耳を傾けてもらえることは、感情をもてあましていた私にとって、とても有意義なことだったのです。(P.107)」

悲嘆カウンセリングは通常の面接構造と異なる「枠」を設定することが少なくない。事件後しばらくして開始された専門的カウンセリングも受苦の感情を受け止める器として機能した。「同行二人」の存在であること、傾聴し受け止める「器」であること、これらの機能を果たす「情緒的サポート」は支援活動の縦糸であると思われる。

③ 事件後～数ヶ月：「自然な反応」の過程と伝える評価的サポート

遺族にとって、事件後生じている悲嘆反応について、それが自分だけであり、普通ではないのではないかという不安に悩まされることがある。しかし、それは正常な反応であることを認め、同様の経験をした人に共通に起こってくることで周囲が理解し、対応していくことが役に立つ。最初の激しい悲嘆反応には専門的な視点からの「評価的サポート」も有効である。

「また、そのころの私は、下の娘の小さな擦り傷を見さえ、事件を思い出して全身が硬直してしまうような精神状態だったので、このまま社会復帰できないのではないかとさえ考えていました。そうした不安をカウンセリングの先生に打ち明けると、『それは遺族として、当然の反応です』という言葉が返ってきました。これを聞いて、今自分に起きていることは、犯罪被害者の遺族として当然の反応なのだと知り、少し気持ちが楽になりました。(P.106)」

④ 1週間目以降：同じ体験をした仲間による気持ちの共有やアドバイス

辛い悲嘆経験は当事者でないと分からない。本郷さんの場合、8遺族との交流を通して、笑いを少しずつ取り戻していくことができた。また、似たよう

な体験をした人々（ピア）による気持ちの「分かち合い」や、時間の過ごし方などの具体的アドバイスや情報提供が、次の行動を起こす原動力となった。米国コロンパイン高校の銃乱射事件の遺族メロディ・スミスさんのメール・メッセージも類似の経験から出る言葉だけに少なからぬサポート感をもたらした。文字通り「ピア・サポート」の効果は大きい。

「それは本当に貴重な体験でした。社会的に大きな話題になった事件に巻き込まれた遺族の方々が、どのように過ごし、いま、どのように生きているのか。みなさんの口から出る一言一言が重く、説得力があり、悲しみの中でも毅然として自分を見失うことのないその姿勢に、強い感銘を受けました。(P.123)」

「(メロディさんの)一文を読んだとき、私は(被害者遺族である)岡村勲弁護士から声をかけてもらったときと同じように、『この人は私を理解してくれる』と感じることが出来ました。(P.133)」

⑤ 事件後～：「一緒にやっへ行こう」という夫(家族)の姿勢

本郷さんの背中を後押ししてくれる最も重要な人物は夫であった。どうにか前に進もうと行動を起こすための提案をしていくという役割は、本郷さんの気持ちを一番理解していた夫だからこそできたことである。何より、同じ方向を見ながら「一緒に」やっていくという「同行」の姿勢が大切である。

「これ以上、悲しい思いをしたくないと、過去の思い出から目をふさいでしまっていた私を、もう一度、優希の記憶と向かい合う気にさせてくれたのは主人です。「俺たち家族は、いつだって優希と一緒になんだ。優希が何を望んでいるか、優希の気持ちになって考えてあげよう」主人はそう言って私を励ましてくれました。(P.80)」

⑥ 1ヶ月目以降：遺族の自発的活動に対する励まし・応援とサポート

被害者家族の願いや自発的活動を後押しするような励ましは効果があるようである。ただ、「励まし」には両義性があり、誰がどのような状況で語るかによって意味が異なってくる。本人に悪気はなく、遺族のことを思って言った励ましであっても、時として遺族を深く傷つけることがある。

「その頃、周囲の方から連日、『頑張って』と励ましの

言葉をもらっていた私は、その言葉に強いプレッシャーと違和感を覚え、『こんな状態にいる私に頑張ると言うけれど、どう頑張ったらいいの?』と途方に暮れ、追い詰められた気持ちにさえなっていました。(P.124)

「署名に添えられた激励の手紙を読むことで、勇気づけられていったのです。(P.127)」

このように、事件直後の遺族にとっては「がんばれ」という励ましの言葉はただのプレッシャーではない。しかし、遺族が自発的に始めた行動、例えば署名活動に対しての応援や励ましといった評価的サポートは逆に勇気づけることになる。励ましに同行の姿勢が感じ取られ、遺族のニーズに応える言葉掛けは有効だと言えそうである。

V. 考察：「絆」の結び直しと「愛の物語」の生成

本郷由美子さんの手記を読み進めていくと肯定的なストーリーから構成されていることに気づく。この手記には阿鼻叫喚地獄の経験が綴られてはいるが、本郷さんの紡ぎ出す「物語」には希望が伝わってくる。なぜそう感じられるのか。ひとつの理由は、この手記が優希ちゃんの「死の物語」ではなく、優希ちゃんの「生の物語」であるからであろう。手記の中で優希ちゃんが新たに命を与えられ、復活し息づいている。そして何より伝わってくるのは優希ちゃんへの再びの「愛の物語」が生まれていることである。

手記を分析していて、優希ちゃんへの切々たる恋文のようにも感じられた。一般に人は恋愛に陥ると三つの欲求が顕著になる。ひとつ目は相手のことを知りたい。二つ目は会いたい。三つ目は側で存在を感じていたい。本郷さんは第三章のタイトルを「優希のことが知りたくて」としている。事件の日、何が起こり、娘はどう生きたのか、その全てを知りたいという強いニーズが本郷さんの胸中に高まった。辛くても全てを知り尽くし、心の中で一つ一つ消化していかないと、前に進むことはできない、それが被害者遺族・本郷さんの実感である。

愛の物語を紡ぐ二番目の条件である「会いたい」というニーズは実際には決して叶えられることはない。叶えられない事実直面することほど悲しく苦しいことはない。できることは優希ちゃんを故人として扱わないこと、今も一緒に生きていることを想定して生活を組み立てることであった。実際に周囲の子どもや大人たちは一緒に学校生活を送っている

ように振る舞った。現実生活に優希ちゃんの「居場所」が設けられていた。実際には会うことが不可能だから、周囲の自然な協力を得て心の中で出会うしかなかった。手記を書くことで出会うしかなかった。

三番目の条件である「側で感じていたい」という感覚も不思議な体験としてあらわれていた。根付いた切り花の花に、娘が育てていた植物に、夫や下の娘の背後に、学校の廊下の空間に、様々の場面で娘と共にいる感覚を覚えるようになっていった。その微かな感覚がひと時の癒しを与えてくれるのである。時の経過の中で「側で感じていたい」という切望に促されて森羅万象に故人の魂の存在を体感できるようになる。

娘との死別にも拘わらず、本郷さんは以前にも増して親子の「絆」が堅固に結び直されるのを実感したと言ってもよい。本郷さんにとってモーニングワークは「絆」を断ち切る作業ではなく、「絆」を結びなおす作業である。もしそうであるなら、ラガーシュ仮説である「死者を殺す」営みでは断じてないと言えないだろうか。本郷さんの主観のレベルでは「死者を復活させる」営みでさえないかもしれない。「生者を(死にも拘わらず)生かし続け、共に生き続ける」壮絶な営みと映るのである。もちろん、本郷さんの事例をもってラガーシュ仮説の妥当性の否定するものではない。この仮説に関しては複数の事例を通してさらに詳細な検討が必要と考えている。

今後、本郷さん親子の「絆」は強まることこそあれ、弱まることはないと思われる。本郷さんは、モーニングワークを通して心の中で優希ちゃんと再会し続けた。バラバラになった優希ちゃんのイメージを再構築した。そして、不思議な体験を通して「愛の物語」を見出し、本郷家の家族サイクルは新たな段階へと踏み出していると思われるのである。

《付記》本研究は学部ゼミ生と半年かけて取り組んだ成果を基礎にまとめたものである。この検討作業を通して、本郷優希ちゃんが我々の心の中にも確かに息づきはじめ、多くのことを学び続けていることを記して、心からの冥福を祈りたい。

文献

- 本郷由美子 (2003) 虹とひまわりの娘. 講談社
Laplanche, J. & Pontalis, J. (1967) 精神分析用語辞典. みすず書房. 444-445.

- 浦 光博 (1992) 支えあう人と人—ソーシャルサポートの社会心理学, サイエンス社.
- 浦田英範・窪田由紀・濱野清志・林幹男・向笠章子 (2001) 学校における緊急支援の手引き. 福岡県臨心理士心理士会.
- やまだようこ (2002) 喪失から生成への物語り. PSIKO, June. 22-29.
- 山下京子 (1997) 彩花へ「生きる力」をありがとう. 河出書房.
- 山本 力 (1994) 展望・欧米における「喪失と分離、悲嘆」理論の展開. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 2(1), 123-135.
- 山本 力 (1997) 喪失の様態と悲哀の仕事. 心理臨床学研究, 14(4), 403-414.
- 山本 力・達野恵美子・西崎博子・石原みちる・平松清志 (2001) 青少年の問題行動等に関する調査研究. 問題行動調査研究委員会 (岡山県).

Title : The Qualitative Analysis of Effective Work of Mourning by Victims' Family

Tsutomu YAMAMOTO (Faculty of Education, Okayama University)
Midori HAMASAKI (Faculty of Education, Okayama University)
Chisato TAMAI (Faculty of Education, Okayama University)
Fumiko YAMASAKI (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract : This paper is the study about victims' family of the murder case in Ikeda elementary school. The purpose of this study was to explore that what kind of coping behavior and social support facilitate effective mourning work. In addition, Validity of Lagache hypothesis that a bereaved kills internally a deceased was discussed. It emerged that the mother has generated a love story between her and a deceased daughter through writing memoirs, and her mourning work has facilitated reunion of a bond of affection between them.

Keywords : the bereaved, mourning work, story-making, social support, Lagache hypothesis
